

平成27年度 国立江田島青少年交流の家教育事業

## われら瀬戸内探偵団～瀬戸内海の環境を守ろう～ 実施報告書

【趣 旨】 近隣の瀬戸内海岸での生物観察・調査からスタートし、瀬戸内海域へフィールドを広げ、環境問題について考えていく体験的・問題解決的な環境学習を実施する。これらを通して、いま自分たちに何ができるかを考え、環境保全・保護に配慮した積極的な行動がとれる意欲・態度を養う。

【主 催】 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立江田島青少年交流の家

【共 催】 江田島市教育委員会

【期 日】 平成27年8月17日(月)～8月19日(水) 2泊3日

【実施会場】 国立江田島青少年交流の家及び荒代海岸周辺  
広島大学生物生産学部附属練習船「豊潮丸」  
瀬戸内海海域

【対 象】 小学5・6年生

【参加者数】 24名

【講 師】	広島大学大学院生物圏科学研究科 広島大学生物生産学部附属練習船「豊潮丸」 大柿自然環境体験学習交流館 国立江田島青少年交流の家	准教授 橋本 俊也 職員 館長 西原 直久 企画指導専門職
-------	--	--

### 【企画・運営のポイント】

- (1) 参加者の意欲を高め、課題意識をもって体験的・問題解決的な環境学習に取り組ませることを目的として、参加者を探偵団として設定し、「瀬戸内海は生き物にとって住みよいか？」という探偵依頼を提示、これに応えることを使命として学習の流れを明確にする。
- (2) 瀬戸内海の環境を生物の観点から捉えるために、海辺の生物観察の指導経験豊富な大柿自然環境体験学習交流館館長の西原直久氏（理学博士）に指導を依頼し、江田島の海を活用して調査・実習を行う。また、瀬戸内海における環境についての理解を深めるために、瀬戸内海の環境に精通する広島大学大学院生物圏科学研究科橋本俊也准教授による講義を行い、瀬戸内海の環境に関する情報を収集するために、広島大学附属の練習船「豊潮丸」に乗船し、海泥や透明度等の海洋観測に取り組む。
- (3) 探偵依頼に応えるための話し合いを行う中で、自分たちが環境に対して何かできないものかという気持ちを高めていく。また、達成感を味わわせ、環境問題に関して行動化を促すことを目的として、環境の保全のために参加者自らが考えた「海辺の清掃活動」を全員で行う。

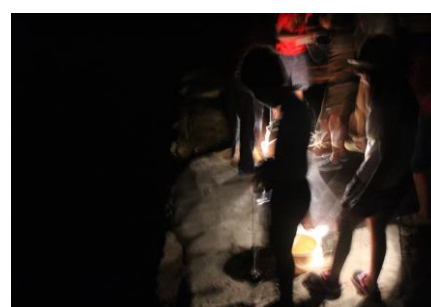
【活動の実際】

17日（月） 1日目	18日（火） 2日目	19日（水） 3日目
13:00 受付	6:40 起床	6:40 起床
13:30 開講式 オリエンテーション	7:10 つどい、清掃、朝食	7:10 つどい、清掃、朝食
13:50 自己紹介、アイスブレイク、班編成	9:30 交流の家発小用港へ 「豊潮丸に乗って海洋観測しよう」	9:00 「荒代海岸で海辺の活動」 ※雨天のため以下に内容変更 「環境を守る！ポスターをつくろう」
15:00 「海辺の生物観察に行く前に」	15:00 小用港着	12:00 昼食
16:00 「瀬戸内海の生き物を観察しよう」	15:30 交流の家着	13:00 退所点検
18:00 夕食	17:00 つどい、夕食、入浴	13:30 まとめ、閉講式
19:00 「なぞの生き物を観察しよう」	19:00 「探偵依頼にこたえよう」	14:30 解散
21:00 入浴	21:30 就寝	
21:30 就寝		

開講式・オリエンテーション（アイスブレイク）



「海辺の生き物観察」・「なぞの生き物を観察しよう」



豊潮丸での講義・海洋観測



### 「探偵依頼にこたえよう」



### 「環境を守る！ポスターをつくろう」



#### 【成果と普及】

- (1) 「瀬戸内海は生き物にとって住みよいか？」という探偵依頼を提示したことによって、参加者からは様々な意見が出てきた。参加者は、探偵依頼に応えるための科学的な視点の必要性を感じて、海辺の生き物観察などの演習に移ることができた。問題解決学習の流れに沿って活動させるには、適切な問いかけであった。
- (2) 参加者は、環境について科学的に考える基準として、実物を観察して分かった事実や専門家の意見を最後まで役立てていたことから、専門家による講義や演習が、その後の活動でも有効に働いたことが分かる。また、参加者から瀬戸内海の環境を守りたいという言葉も聞かれ、積極的な行動につながる意欲を喚起したことがうかがえる。
- (3) 最終日は、雨天のため、参加者からの意見をもとに「海辺の清掃活動」を「ポスター作り」へと活動内容を変更した。グループごとに話し合いながら作業を進める中で、参加者は、話し合いの内容や学習したことをしっかりと整理して発信する作業にとりかかることができた。初日に、アイスブレイクで参加者間の関係づくりを促し、話し合いが活発に行えるように備えたことが効果的であった。
- (4) 参加者への事前・事後アンケートを比較すると、「瀬戸内海の環境」への興味関心についての問いに、「とてもある」「ある」と答えた参加者は、61%から83%に上昇した。また、「瀬戸内海の環境は、あなたと関係があるか」という問いに、事前では「とても思う」が9%、「思う」が70%であったが、事後ではそれぞれ、48%、35%と分布上昇が見られ、自分と環境との関係について、参加者の意識が向上したことが分かる。さらに、「瀬戸内海の環境を守るために自分にできること」が「とてもある」「ある」と答えた参加者は、70%から83%に上昇、加えて、個人内比較をすると、「そのために具体的にどんなことができるか」の追問では、74%の参加者の記述に具体例の増加が見られた。以上から、環境に配慮しようとする意欲・態度が高められたと考えられる。

#### 【今後の課題】

- (1) 本事業は、同じ活動内容で8年目になる。学習にストーリー性を持たせた「瀬戸内探偵団」の設定を見直し、エンターテインメント性を高めたり、提案型の学習にしたりするなどの検討をする。

- (2) 活動内容の学習効果を高めるために、年度当初に、旧担当と新担当とで事業の方向性について検討し、企画指導専門職間で共通理解を図る。その上で、講師、関係者との事前の打合せに早い段階で入るようにする。講義や演習の内容は、専門的なものを可能な限り小学校高学年でも分かるように説明いただけるよう、使用する資料が事業のねらいに迫るものになるよう、講師に協力を仰ぐ。
- (3) 講義や演習の内容について、参加者の理解度に差が生じ、その後のグループ活動がスムーズではなかったため、小学4～6年生だった対象学年を小学5・6年生にした。また、参加者を決定する際に抽選したにもかかわらず、過去に参加したことのある子供が再び当選したという状況が生じていたため、過去に参加したことのある者は、応募できないとした。講義や話し合いなど、学習の内容を考えると、対象を2学年に絞ったことは適切であったと思われるので、来年度も同程度の内容なら措置を継続する。